

東亞天文協會 1934年五月 例會の記事

五月26日15時、花山天文臺にて開催。高城武夫が座長席につきまづ、
座長より會の現況、ならびに最近各方面より受理せる寄贈圖書等の報告あり。
次で座長は講演者山本理學博士を紹介す。こゝで

山本氏は、「月の運動について」、古くギリシャのヒパルコス時代から説き起し、トレミ、チヒヨ等を経て、ニウトンと其の力學の大要を説明し、月の運動が如何に複雑なるものなるかを述べ、從つて此の理論を實地の月の経緯度に表示するためのハンゼンやブラウン等の研究の事を語つた。次に一轉して、此の日、天文臺内に陳列されてゐる朝枝松太郎氏の三球儀が、畢竟するに月の運動を精密に模した點に於いて優れたものである點を指摘し、其れに因んで、十數年にわたる朝枝氏の研究勞苦と其の略傳とを述べた。要旨は：

朝枝松太郎氏は嘉永三年十一月十三日(1850年12月16日)周防國柳井に生れ、幼時寺小屋で普通の初等教育を受けしのみ。家業は大工職を以つて一生を貫けり。若年の頃より諸種の器械構造に深き興味を有ち、常々研究的態度を捨てざりしが、明治38年(1905年)即ち46歳の頃、天體運行模型を作らんと志し、屋上又は後庭等に夜空の現象を観察し、方位并に諸角度等を測定し、遂に明治42年(1909年)に至つて第一期の三球儀を完成せり。之れに用ゐるし部分は皆古き時計の齒車等を其のまゝ利用せり。次で大正五年(1916年)、更に改良せる第二期作品を得、人に薦められて新案特許の出願をなせしが、米國に Tellurian なる同種品ありとの理由にて却下せられしも、屈せず、大正七年(1918年)更に偏心環を月の運動に附加するなど、絶えず改良に腐心す。同年六月、之れを京都帝國大學天文臺に持参し山本百濟兩理學士に面接、學術的鑑査を乞ひ、其の優秀なるを賞せられ、證明書を獲たり。大正九年(1920年)尙一層改良せる第三期三球儀製作に着手せしが、翌十年三月大阪市民博物館内の天文展覽會へ出品を促され、尙ほ第三期品の完成せざるを以つて、第二期品を出品せり。大正十二年(1923年)三月初、第三期品完成せしが、間もなく同月22日七十四歳を以つて死去す。遺品は、大正十五年山本氏が親しく朝枝家を訪問せし時の約束により、今回遺子朝枝幸介遺孫英二兩氏より花山天文臺に寄贈せり。

最後に山本氏は朝枝松太郎氏の寫眞を幻燈で紹介した。次で龜井壽彦氏、最近の太陽點出現狀況について、又柴田理學士は Jackson 星が彗星でなく、小遊星であつた件を報告し、終つて會を閉ぢた。此の日來集者總計58名。日没後は稻葉氏等によつて月や木星の觀覽が指導された。